解題

この論文集は筆者が2018年春から2023年春までに携わったアカデミズムにおける研究成果を示すものである。筆者は『平田篤胤の「音義説」　～その時代的背景と意義～』により放送大学大学院文化科学研究科より修士号（人文学）、『小京都と京都の比較研究　―土佐中村を中心として―』により京都産業大学大学院京都文化学研究科より修士号（歴史地理学）、そして『自然言語処理を用いた我が国外交文書のトピック分析とその外交実務上の活用　Analysis of Japanese Diplomatic Documents with Topic Modelling and its Utilization in Diplomatic Practice』により立教大学大学院人工知能科学研究科より修士号（人工知能科学）をそれぞれ修得した。

これら3つの論文は一見すると全く無関係の様に見えるが、実際には相互に深く連関している。そもそも筆者が課題として認識していたのは我が国の幕末に発展した国学の中で展開されたいわゆる「音義説」の持つ現代的意義の確定であった。平田篤胤によってクライマックスを迎えたこの「音義説」を現代の我が国におけるアカデミズムはまともに取り合おうとはしない。それは一つに、先の大戦へとまっしぐらに突き進む際の一つの思想的原動力として平田国学が祀り上げられたことに対し、戦後になってから和辻哲郎が激しく論難したことによっている。だが同時に「音義説」は文理融合型あるいは学際型の知の体系そのものであり、我が国において高度に細分化されたアカデミズムではおよそ歯が立たない代物であるという実際の理由があったことも否めない。『平田篤胤の「音義説」』はそうした現況の中で筆者が格闘した結果の一端を示したものである。オンラインによる修論審査会の際、副査を務めて頂いた吉田麻子先生と激論になったことも今となっては懐かしい思い出である。

『小京都と京都の比較研究』はこうした「音義説」研究の上にも立ちながら、基本的には祭祀を基盤とする都市構造の典型としての「京都」に関するプロトタイプを文献研究とフィールドワークによって抽出しようと試みたものである。とりわけこうしたプロトタイプの文脈においてしばしば語られる「小京都」の典型としての土佐中村を巡り残されている数少ない史料と、これに取り組んだ先行研究の向こう側にある「目には見えないもの」を炙り出すことに専心した。「音義説」研究もまた「目には見えないもの」に対する取り組みであるだけに、これら双方の研究には相通ずるものがある。そして筆者は、この意味での考察を行う中、現地の一宮神社に伝わっていた七星剣の年代特定によって土佐中村に関する一連のミッシング・リンクが繋がることにたどり着くことが出来た。現在、弊研究所（株式会社原田武夫国際戦略情報研究所）の社会貢献事業として、この「七星剣」を巡る年代特定事業への寄付を四万十市に対して行っているのはこうした研究の延長線上での取り組みに他ならない。

「音義説」が時間と空間の両方を包摂するフレームワークとしての（日本語固有の）五十音図をハイライトしていること、さらにはプロトタイプとしての「京都」が祭祀を軸としつつも物理的な都市構造としての「小京都」を全国で発展させたことをも暗黙裡に踏まえつつ、いよいよ日本語という言語が持つ普遍性を、あえて数学（確率論）上のツールとしての人工知能（artificial intelligence）と欧米由来の外交（diplomacy）で用いられるテキスト由来のコーパスをもって抽出しようとしたのが『自然言語処理を用いた我が国外交文書のトピック分析とその外交実務上の活用』である。「音義説」は五十音図で示される各音の配列の持つ（現代の言葉でいうならば「宇宙物理学・量子力学的な」）目に見えない意義を述べ、もって日本語の優位性を説くものであるが、そうした日本語を用いた表現が必ずしも日本語を解するわけではない諸国民へと伝搬される外交場裏で理解される「意味」が生起する瞬間を、とりわけ構造的トピック分析（Structural Topic Modelling）で可視化させるべく、筆者はこの論文において研究に取り組んだ。

2023年になり、自然言語処理（Natural Language Processing）ではChatGPTがもっぱら話題となっているが、そこでベースとされている生成型AI（Generative AI）アルゴリズムは結局のところ、語と語の関係性を確率でつなげようとするものに過ぎず、不完全なものに留まっている。やはりそこでも最終的に「意味を確認する」という作業が必要とされている。同じく確率論をツールとして使いつつも、ヒトだけが理解し得る意味の塊としての「トピック」概念を中心にトピック分析（topic modelling）が打ち立てた視座は、現代においてもなお決して色褪せてはいないと筆者は考えている。

世上がこの5年余りの間にすっかり騒がしくなり、そこでは様々な流言飛語が飛び交うようになりつつある。そうした中であっても真実とは何かを愚直に追求するために絶対に必要なのが科学（science（英）, Wissenschaft（独））であり、そこで確立されてきた方法論の体得であると筆者は確信している。我が国における史的な展開を第一義的なフィールドにしつつ、そこで日本語により執り行われてきた祭祀とそれに内包された思念をいう「見えない世界」を、こうした科学によって人類社会全体に向け一気に解き放ち、もって未来に向けた最適解を見出し、社会実装する。これこそ、弊研究所が掲げるパックス・ジャポニカ（Pax Japonica）のスピリットなのである。そして、この論文集に編まれた3つの論文が指し示しているのもそうした方向性に他ならない。その意味でこれら3つの論文は目指すべきパックス・ジャポニカ（Pax Japonica）にとって、恒久的な知的インフラ構築のための一助となるべきものである。

2023年7月吉日
東京・丸の内にて

原田　武夫
株式会社原田武夫国際戦略情報研究所　代表取締役CEO

（*収録論文はいずれも修士論文審査通過後のテキストに字句上の修正を若干施したものです。）